

山梨県の土偶

—遺構出土土偶を中心として—

小野正文

1. はじめに
2. 山梨県の土偶の変遷
3. 時期別出土状況
4. 出土状況の分析

1. はじめに

山梨県はおそらく縄文中期の土偶出土数は日本で最も多い地域ではないかと想像される。このことは既に1932年の『先史原始時代調査』⁽¹⁾で北巨摩郡下の土偶55点が、長野県諏訪郡23点、上伊那郡14点、佐久郡10点と比較して多いと指摘されているところである。

現在県下では土偶は約1700点余り出土している。このうち釈迦堂遺跡群と金生遺跡の土偶がその大半を占めることになるが、基本的には縄文時代の集落址の場合土偶が出土しない遺跡はないと過言してもよいほど土偶の出土は多いのである。ところが、近接する長野県諏訪地方では土偶をまったく出土しない集落址も珍しくない。このように土偶の集落址における遍在性をどのように理解すべきか、今後の大きな問題の一つである。また、こうした問題を解決するには、土偶の時間的位地を決定する必要がある。そこで本稿では遺構出土の土偶を中心に出土状況を検討したい。

なお、図示できなかったものは原報告の（図版番号—番号）の形で示しておきたいと思う。

2. 山梨県の土偶の変遷

山梨県内の土偶の出土状態の分析をする前に、おおよその土偶の変遷について、概観しておきたい。土偶の時期決定については、土器との共伴関係に乏しい点、土偶に個々の時期特有の文様を施すことが少ない点、あるいは土偶の継続的使用を考えれば、時期決定は多くの困難な問題がつきまとう。著名な土偶についても、最近の研究によってその所属時期が訂正された例がある。

（1）前期土偶

県内の前期土偶は釈迦堂遺跡群の黒浜式併行の釈迦堂Aタイプ土偶⁽²⁾、釈迦堂Bタイプ土偶と大曲輪タイプ土偶の大きく3つのタイプに分類される。このうち釈迦堂A、Bタイプの土偶は未だ

広域的には検出されず、恐らくはわれわれの言うところの⁽³⁾釈迦堂Z3式土器に伴うものと理解される。これに対して大曲輪タイプとしたものは、北白川下層式土器に伴うもので、北白川下層式の広範囲の分布からも知られるように広い分布を有している。しかも頭部に穿孔を有するものは、これ以降の関東東北地方の前期土偶にも認められるので大きな影響を与えたものと思われる。

諸磯式土偶は最近の発掘例の増加にともない、いくつかの類例が知られるようになった。その中でも一類型をなすと考えられるのが、群馬県八幡山遺跡⁽⁴⁾土偶である。形態的には花輪台貝塚のバイオリン形土偶からの系譜を引くものと思われる。近接する時期の愛知県二股貝塚土偶⁽⁵⁾とよく類似し、形態的連続性が窺われる。また同じ群馬県城遺跡の頭部に孔を有する土偶は大曲輪タイプの系譜を引くものと考えられ、また時期的には宮城県糠塚遺跡土偶⁽⁶⁾など何らかの脈絡を有するものと思われる。長野県海戸遺跡前期土偶⁽⁷⁾は堅臼形をなし胸部に窪みがある。この窪みは糠塚遺跡土偶とも関連があるものと考えられ、土偶の持つ意味の一つの表現形式であると考えられる。

山梨県では類例の増加した獅子之前Bタイプ土偶は、やはり花輪台のバイオリン形土偶と形態的には類似するが、乳房の表現がなく、全体的に表面が中窪み状をなしている。塩山市獅子之前遺跡、一宮町釈迦堂遺跡塚越北A地区、境川村一の沢北遺跡⁽⁸⁾、大泉村天神遺跡⁽⁹⁾の4ヶ所のいずれも諸磯b式の住居址から出土している。獅子之前Aタイプ土偶は全体像は不明だが、諸磯b式の有脚土偶と考えられるもので、該期にすでに中期的土偶が出土することは驚きに値する。

以上のように前期土偶のうち、諸磯a式土偶は検出例がなく、諸磯b式土偶は既に地域的に多様な形態があり出土点数も多い。また諸磯c式土偶は群馬県黒熊第5遺跡⁽¹⁰⁾で2例、次の十三菩提式土偶は東京都桜畑遺跡⁽¹¹⁾で、1例が知られていることから前期土偶は後半期から土器型式を中断する事なく検出される可能性が高まった。

(2) 中期土偶

中期土偶は五領ケ台式期を除いて、前半と後半に区分しておくのが理解しやすい。五領ケ台式期の土偶については、十分判明していないが、いわゆるカップ形土偶がよく知られている。カップ形土偶はその後も見られるが、五領ケ台式の中ごろの段階から土偶は大きな変化をするようである。

いわゆる集合沈線文土器に伴う土偶の実態は明らかでないが、釈迦堂塚越北B地区で、カップ形土偶の大型品が出土している点や中道町上の平遺跡⁽¹²⁾でやはりカップ形土偶が出土している。この事例から、該期の土偶はようやく顔の表現を持った立像形のカップ形土偶であると言える。しかも中道町下向山遺跡⁽¹³⁾の土偶から自立するのである。前期では顔の表現を拒否してきた土偶が、ようやく表情を持ち、自立するようになったのである。また、長野県大石遺跡⁽¹⁴⁾30号住居址出土土偶は、お産する土偶で、五領ケ台2b式期に比定される。この点、五領ケ台式期は土偶が表情を持つ点において重要であるばかりでなく、いくつかの姿態を持ったものの出現もまた重要である。あるいは、土器型式上も一つの画期が存在するのかもしれない。

五領ケ台Ⅱ式の段階からいくつかの形態が見られるが、新道式土器群⁽¹⁵⁾の時期の土偶は大きさも姿態も豊富である。大型土偶としては黒駒の土偶のように現存高だけでも、25cmを越え、推定高は40cm前後になるものも存在する。また中には数cmの小型土偶もある。基本的な形態は、水平に両手を広げた立像形のA形態、これと別に両手を下げたA2形態、円錐形中空土偶であるB1形態、円錐形中実土偶であるB2形態、B1形態の土偶は小淵沢町出土品や富山県上山田遺跡⁽¹⁶⁾の子を背負う土偶のように組み合わせ土偶もあり、さらに区分の必要があるかもしれない。C形態はいわゆるお産をする土偶である。これと近似した形態が壺を抱えるD形態の土偶である。E形態の土偶は抽象的土偶であり、土偶としての文様を持つが、土偶の範疇を越えるものであるかもしれない。F形態は小型土偶、G形態は大型中実土偶である。H形態は大型中実土偶である。

土偶は割られて出土するので、形態分類が進んでいけば、どの部分か明確になる。また遺跡の特徴もこの形態分類から、導き出されると思われる。

中期後半の曾利式期については、いくつかの編年案が提示されているが、われわれはまた釈迦堂案⁽¹⁷⁾を提示したところである。曾利式を大きく、古、新、新新に大きく分離する。古段階は重弧文土器など特殊なものを除いて、口縁部文様帯を持たない段階、新段階は加曾利E式の影響を受けた口縁部文様帯を持った土器が主体となる段階、新新段階は新段階の口縁部文様帯が喪失される段階である。こうした大きく分離し、次に細かく分離する方法は考古学の上ではまったく一般的な方法である。また土偶のように土器型式との搬出関係が不明確な遺物については、位置づけが容易に行える利点がある。

曾利群土偶の形態はほぼ立像形に限られ、新道式土器群期土偶とは画然と区分される。その意味では個々のタイプの違いのみが存在するのかもしれない。新道式土器群期で発達したさまざまな姿態の土偶は喪失し、単純な形態のみに帰結するのはいかなる理由が存在するのであろうか。筆者は住居内における炉の焚口方向の逆転から、社会組織の変革が存在したと考えている。⁽¹⁸⁾

(3) 後期の土偶

山梨県下では、後期に主体的な土器型式は存在しないように思える。したがって、土偶もまた型式的に独立したものは見あたらない。そこで周辺地域、特に関東地方の土偶と比較しながら、その編年の位地を決定して行く必要がある。ただし、やや大まかな区分にならざるを得ない。

称名寺式期の土偶は現在知られていない。堀之内式期の土偶はハート形土偶が明野村水窪遺跡⁽¹⁹⁾で1点、また恐らくはハート形土偶の類型に入ると思われる土偶が、韮崎市後田遺跡から出土している。中空である点は長野県辰野町泉水遺跡土偶⁽²⁰⁾に近似する。やや上を向いた顔、直線状の肩、直角に曲がる腕、O脚状の脚はハート形土偶の特色をよく備えている。特に顔の表現には特色があり、金生遺跡の土偶の中にも該期のものを見いだすことができる。後田、泉水例はいずれも堀之内式期でも新しい部分に属するのではないかと思われる。

また高根町青木遺跡⁽²¹⁾の土偶に見られる腰部に沈線による鋸歯文を有する土偶は、関東地方から

東北地方の後期土偶に見られ、⁽²²⁾ 時期的には加曽利B式期に属すると榑原功一氏の指摘がある。

加曽利B式期の土偶は、⁽²³⁾ 高根町石堂遺跡のほぼ完全な土偶がこの地方の該期の全体像の判明する土偶として、時期決定上重要な資料といえる。注目すべきは胸元に加曽利B1式期特有の逆「の」字状文を描いている点であり、顔、乳房、腕の表現方法は加曽利B1式期の特徴とみなすことができる。とくに腕から胸にかけての隆帯状の表現はおおきな特徴であり、金生遺跡の土偶のなかにも見いだすことができる。

これとは別に、山形土偶の類型に入る土偶が、⁽²⁴⁾ 都留市中谷遺跡、⁽²⁵⁾ 大泉村金生遺跡に数点見られる。関東地方の山形土偶より、僱平で山形がカーブしているのが、一つの特徴であろう。

加曽利B式期以降の県内の土器型式の変化の様相も、金生遺跡の報告で次第に明らかとなってきたが、金生遺跡と比較する遺跡が皆無であり、土偶が個々の土器型式にどのように対応するのかは、依然として不明な部分が多い。

(4) 晩期の土偶

遺跡における晩期の土器型式が複雑な様相を示しているように土偶もまた各地の土偶の影響を受けているものと思われる。その中で清水天王山式土偶は特徴的である。板状をなし有文と無文のものがある。中谷遺跡の耳飾りを付けた土偶は、正面には文様を持たないが、裏面には清水天王山⁽²⁶⁾3式の特徴的な沈線による入り組み三叉文が描かれている。

なお、新津健氏は中谷遺跡の土偶の中には大洞系の中空土偶の存在を指摘している。⁽²⁷⁾ また、晩期後半の段階では、金生遺跡に大洞A式段階の浮線網状文を施した土偶も見られる。著名な中空土偶は、土偶であることを疑問視する意見もあるが、筆者らは2号配石遺構という祭祀遺構からの出土であるので、土偶として認識している。

(5) 弥生時代の土偶

弥生時代の土偶としては容器形土偶がよく知られているが、縄文土偶とほとんど変わることはない中実土偶もある。容器形土偶は東八代郡岡で2個体、⁽²⁸⁾ 葦崎市坂井で1個体の出土がある。岡の容器形土偶は調査者の野沢昌康氏の報告では2個体であるが、筆者がこの土偶の修復時に破片を分析した折りには他に別個体の破片と条痕のある土器片を観察している。

敷島町金の尾遺跡の中実土偶は、頭部を欠くが、体部の形態は容器形土偶とよく類似し、また腹部のクランク状の文様は縄文晩期終末以来の伝統を強く残している。頭部については不明だが、容器形土偶と同様にガマグチのような構造をなすと思われる。

3. 時期別出土状況

(1) 前期釈迦堂Z 3 式期と諸磯b 式期の土偶

釈迦堂Z 式期の土偶は釈迦堂塚越北A 地区で、6 個体、獅子之前遺跡で3 個体の計9 個体の出土がある。塚越北A 地区で、釈迦堂A タイプ土偶(1)は、SB-05で頸部から下の部分とSK-227で頭部の一部が出土している。また釈迦堂B タイプの土偶(2)はSB-05の同一住居内であるかもしれないが、頭部と胴部(2)が別々に出土している。大曲輪タイプの土偶(3)もSB-05とSB-27の別々の住居址から出土している。獅子之前遺跡の釈迦堂A タイプ土偶の胴下半分(9)は17住居址から出土し、胸腕部(7)はグリットから出土している。釈迦堂遺跡群塚越北A 地区の事例から、釈迦堂Z 3 式段階において、既に土偶が分割遺棄されることは明かである。

塚越北A 地区のような小さな集落址であるが、全面を発掘した遺跡でも土偶は完結しないことも指摘できよう。また釈迦堂Z 3 式期は、近接する長野県では阿久Ⅲ a, b 期にあたるが、阿久⁽²⁹⁾遺跡の該期の大集落址では土偶は1 点も検出されていない。また獅子之前遺跡は幅12mの道路幅だけの調査ではあるが、前期の大集落址の様相は示さない。このように前期集落址における土偶の遍在性もまた指摘できるのである。

諸磯b 式期の土偶は釈迦堂、獅子之前、一の沢西、天神の各遺跡で、それぞれ1 点、計4 点が出土している。諸磯b 式の獅子之前A タイプの土偶の一つ(11)は4 号住居址から出土し、恐らくは同一個体と思われる他の一つ(13)はグリットから出土している。このタイプの土偶は、既に諸磯b 式期から手足を明確に造形した、いわば中期的土偶が存在することを証明しており、仮に浮線文がなければ、中期土偶と誤認しているものもあるのではないかと危惧される。

獅子之前B タイプの土偶は獅子之前遺跡(11)、釈迦堂塚越北A 地区(10)、一の沢北遺跡、天神遺跡で出土し、諸磯b 式期特有の土偶として認識される。形態的には花輪台B タイプの系譜を引くものと思われ、乳房の表現のない土偶である。表面に窪みのある点は釈迦堂A タイプ土偶からの継続性が窺われる。山梨県地域では諸磯b 式期特有の土偶として認識される。

諸磯c 式土偶や十三菩提式期の土偶は未だ検出例がないが、群馬県、東京都に出土例があるので、近い将来出土を見るであろう。

前期土偶から既に分割遺棄されることは明らかであり、また分割遺棄は同一集落址内に留まらないと推定される。さらに集落間における土偶の遍在性も指摘される所である。

(2) 中期五領ヶ台式期の土偶

五領ヶ台式期の土偶は、カップ形土偶がよく知られている。類例を北巨摩方面から抽出してみよう。高根町では海道前C 遺跡⁽³⁰⁾で頭部の表採品1 点と当町遺跡⁽³¹⁾で頭部が1 点遺構外から出土している。この当町例はあるいは後続する時期の土偶の可能性もあり、頸部背面の文様は、黒駒の土

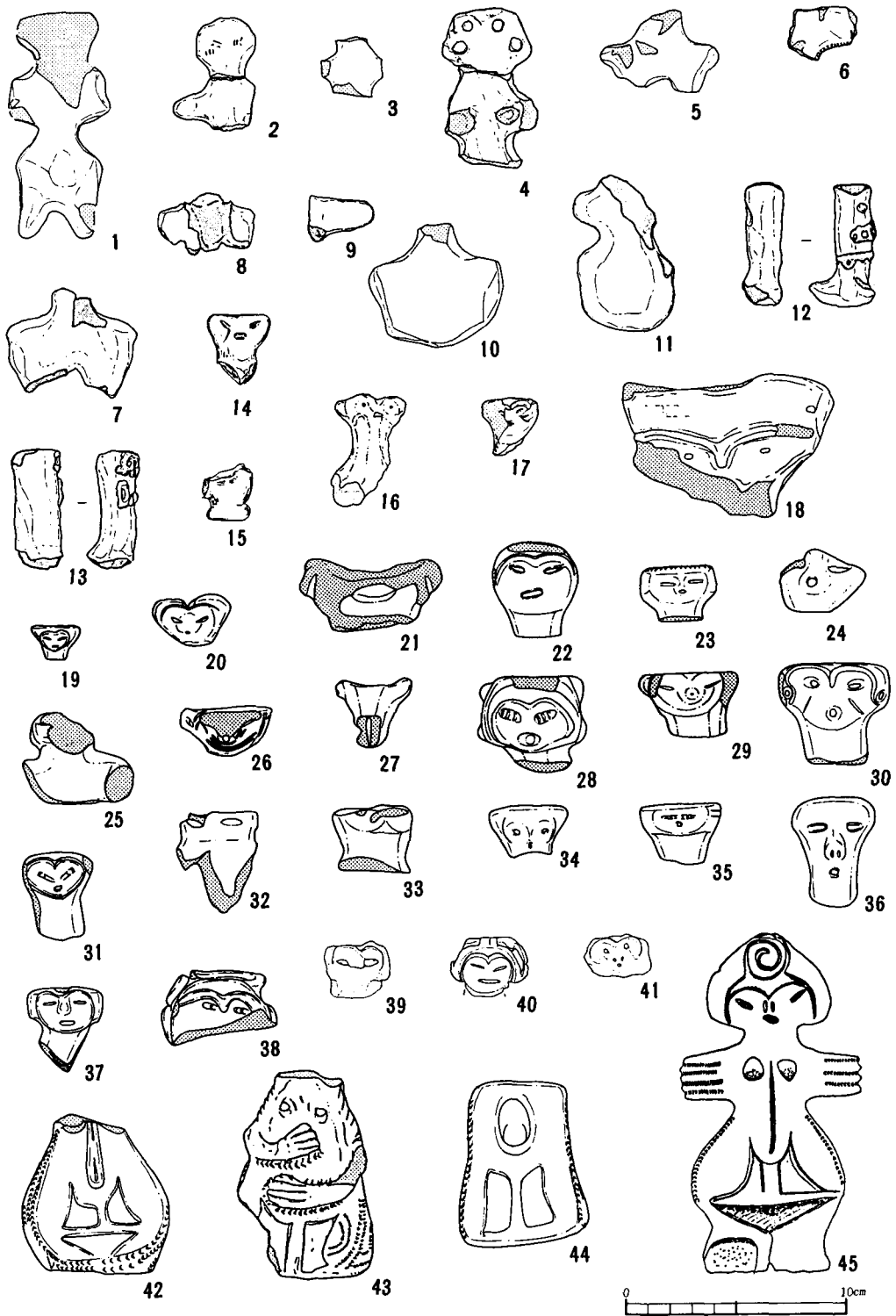


図 1

1～6, 10, 17～42, 44 釈迦堂 7～9, 11～13 獅子之前
 14, 15 下向山 16 上の平 43 宮の上 45 坂井

偶と類似する。この地域では他に未発表資料ではあるが大泉村天神遺跡で、8軒の集落址に対して頭部が1点出土している。東八代郡地域では中道町上の平遺跡で弥生の10号住居址のピットから頭部(16)が1点出土している。五領ヶ台式期の住居址数は6軒である。同町下向山遺跡では住居址1軒が検出され、同一個体と言われる頭部(14)と左脚部(15)が出土している。出土土器の時期が五領ヶ台Ⅱc式期であるから、この時期から既に自立形の土偶が存在したことになる。

塚越北A地区では頭部が2点住居址(17)とグリットから出土している。住居址は出土土器から五領ヶ台Ⅱa式に相当する。S—Ⅱ区では大型のカップ形土偶(18)が1点出土しており、5軒の集合沈線文系土器を出土する住居址を検出している。三口神平地区ではカップ形土偶の頭部(19, 20, 21, 22, 23, 24, 25)7点、S—Ⅳ区で(26, 27, 28, 29)の4点、このうち(26)は高根町当町遺跡の土偶と類似し、やや新しい傾向がある。目に見られる押し引き文から、貉沢式ないし新道式期に属するものと思われる。N—Ⅲ区では1点(30)、N—Ⅳでは(31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 28)の8点(32)が出土している。この三口神平地区では5軒の住居址の検出がある。野呂原地区⁽³²⁾では3点(39, 40, 41)が出土しているが、住居址の検出はない。

郡内地域では都留市久保地遺跡⁽³³⁾のような、五領ヶ台式期の良好な集落址があるのにも関わらず、土偶の出土は見えていない。

天神遺跡の住居7軒に対して1点と言う割合と釈迦堂遺跡群の三口神平地区のように、出土点数の多い集落址もあり、ここでも土偶の遍在的あり方が指摘されよう。

先述したように、県内では既報告例はないが、この時期からさまざまな形態の土偶が出現してくることも、新道式土器群期の土偶の多様な形態の萌芽的要素として重要である。

(3) 中期貉沢式期の土偶

貉沢式期の住居址の検出は極めて少ない。釈迦堂で3軒の住居址を検出しているのが最も多い。釈迦堂三口神平地区(S—Ⅳ)で1軒良好な住居址を検出しているが、土偶の脚部2点(613図—155, 156)の出土がある。また上層の住居址から該期と思われるものが出土している。他には勝沼町宮之上遺跡で、やや古手の良好な住居址を検出している。また長坂町小和田館跡の調査で集落址を検出していると言う。特に宮之上遺跡は五領ヶ台式から貉沢式の土器が層位的に検出され、土偶の出土も豊富であることから、本報告が期待される。

単独出土の資料では貉沢式期の資料ではないかと思われるものが幾つかある。A形態では韮崎市坂井遺跡⁽³⁴⁾の完形土偶(45)がある。額部にあるJ字文は同期の土器の口縁部文様として、よく隆帯で表現される。また水平に広げた幅広い両手は、該期の特色で指の表現として、角押文が施文される。下腹部の対称弧刻文は五領ヶ台式期の土偶には認められないもので、曾利式期では変質し、弧刻文状を呈さなくなる。以上のように貉沢式の特徴をよく表出した資料である。またB1形態の小淵沢町出土⁽³⁵⁾と伝えられる資料は角押文が充填される。釈迦堂S—Ⅲ区(226—49)のE形態とした抽象的な土偶もまた角押文が充填され、貉沢式期の土偶であると認識される。また、

境川村一の沢北遺跡の腕部は扁平であることと、角押文を有することから、貉沢式土偶と認識される。先述の高根町当町遺跡出土の頭部は東京都神谷原遺跡⁽³⁶⁾の頭部(333図—40)と類似する事から、貉沢式期に比定される可能性がある。

近県の例では東京都神谷原遺跡の神谷原Ⅱ期の資料(330図—4, 331図—25, 332図—32, 333図—40, 331図—22, 332図—37)がこれにあたる。22は異時期の住居址だが、角押文を施されることから、Ⅱ期に編入される。22, 32はA形態に属し、37はD形態に属する。お産をするC形態の土偶は現在貉沢式期では報告がないが、大石遺跡の五領ヶ台Ⅱb式期にあるので、いずれ発見されよう。

(4) 中期新道式期の土偶

新道式期の土偶は三角押文が施され特徴的であるが、藤内式期の土偶もまた三角押文が施されることが多く、両者を厳密に区分することは困難である場合が多い。

新道式期A形態の土偶は釈迦堂三口神平地区(S—Ⅳ区)SB—53出土の腹部(42)が典型的な例である。正中線を隆帯で表現し、対称弧刻文を刻み、その下の逆三角形文も刻まれている。また脇腹部には三角陰刻文がほどこされ、その間を連続三角押文で充填している。B1形態の中空円錐形土偶は、勝沼町宮之上遺跡⁽³⁷⁾の出土品(43)が典型的な例である。C形態の土偶は県内では好例がないが、神谷原遺跡では該期に2点の出土がある。D形態の壺を抱える土偶は報告例がない。E形態土偶(44)は釈迦堂では貉沢式期から出土例があるが、長野県棚畑遺跡⁽³⁸⁾の40号住居址出土の無文の板状土偶(112図)が集合沈線文土器と伴出しており、五領ヶ台Ⅰ式段階に比定される。あるいはこの形態は、前期の海戸遺跡土偶からの脈絡を保っているのかもしれない。G形態は黒駒の土偶(46)がこれにあたる。この土偶は頸背部の文様と頸部の円形刺突文が時期を知る手がかりである。

長坂町頭無遺跡⁽³⁹⁾の集石の中から背部に黒駒の土偶と同じポーズをし、三角押文を持つ小型の土偶の出土(47)がある。同町下原遺跡の2つの頭部は、いずれも三角押文を多用する。韭崎市坂井遺跡の組み合わせ土偶の頭部(48)と思われるものは、頸部に三角押文を施し、後頭部は渦巻三叉文⁽⁴⁰⁾になっている。

釈迦堂の新道式期の集落址はS—Ⅲ区SB—18, 78, 95, 111, S—Ⅳ区SB—53, 68, 69, 80, 81の9軒であるが、68, 69, 80, 81は重複であるから、5軒の集落址ということになる。このなかでも土偶を有する住居址はかぎられ、SB—53では23点の土偶が出土し、集中する傾向がある。SB—53は深さが約130cmもある特異な住居址であり、他の出土遺物も豊富であった。

土坑からはS—Ⅲ区SK—291出土頭部(49)、SK—60出土腹部(50)、SK—129(49)が該期のものであろう。

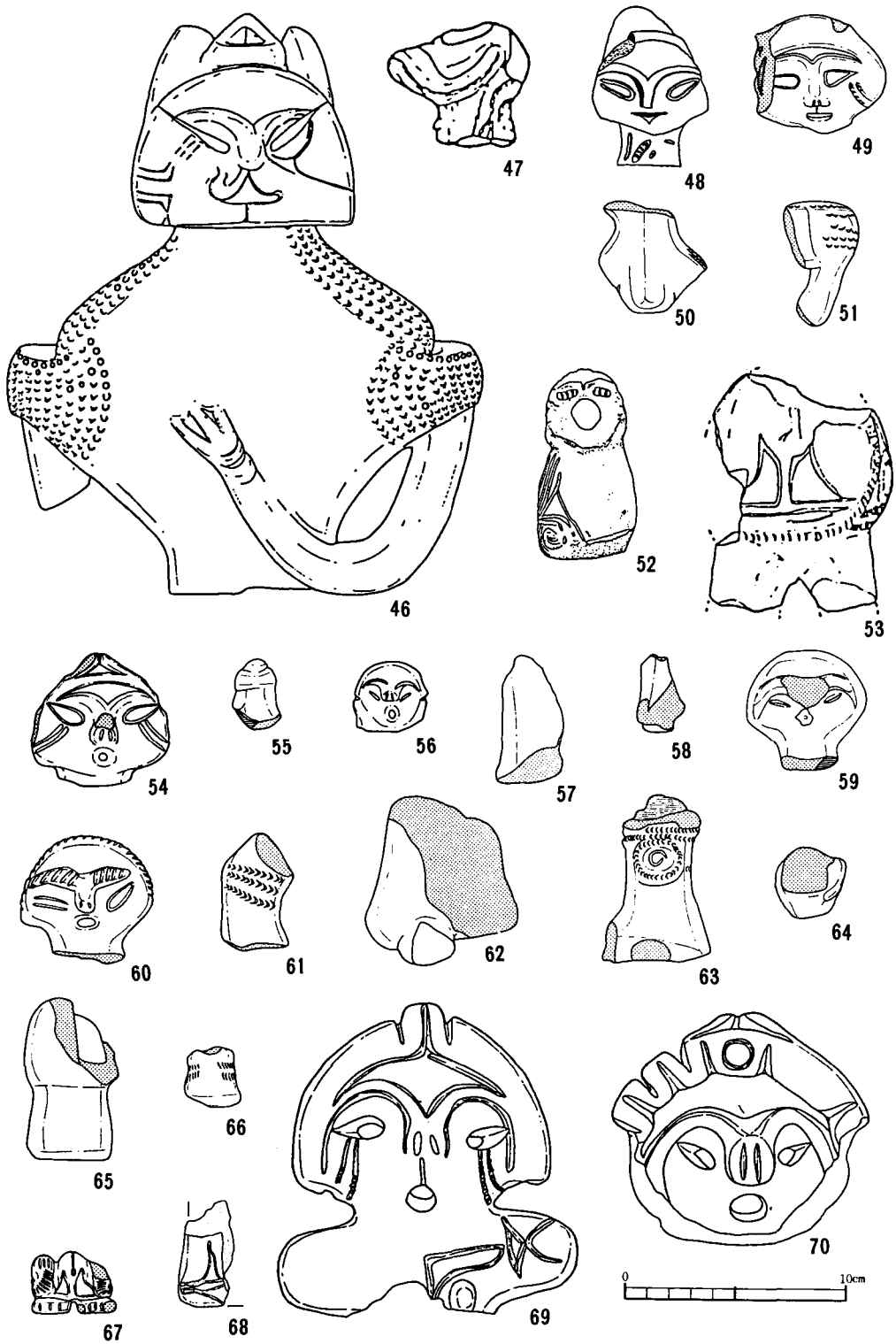


図2

46 坂井 48 頭無 48 坂井 49~51, 54~67 釈迦堂
52 坂井南 53 木 68 上野原 69, 70 一の沢西

(5) 中期藤内式期の土偶

藤内式期の住居址の検出例は一段と多くなる。北巨摩郡では藤内式期の土偶はあるが、住居址および集落址出土のものはない。韮崎市坂井南遺跡⁽⁴¹⁾の笛形土偶とも称されたB2形態の円錐形土偶(50)は特異な存在である。中巨摩郡では櫛形町メ木遺跡⁽⁴²⁾の2点がある。4軒の住居址と2基の竪穴状遺構を検出している。このうち1号住居址は新道式期、2号竪穴状遺構は井戸尻式期に比定されるから、該期では3軒の住居と1基の竪穴状遺構に2個体の土偶ということになり、土偶出土にきわだった特色はない。特に1号竪穴状遺構出土品(52)は腹部に対称弧刻文を有し、脇腹部には玉抱き三叉文を陰刻し、キャタピラ文で充填している。A形態の典型的な土偶である。

東八代郡では中道町上野原遺跡⁽⁴³⁾で5, 12, 15号住居址が藤内式期の住居址であるが、土偶は1点15号住居址から出土している。同じく上の平遺跡では、8軒の藤内期の住居址が検出されているが、土偶が出土したのは、16, 24, 25の3軒4点で、藤内期と考えられる土偶は(46図-2, 14)の2点である。25住居址出土土偶が、A形態の腹部である(46図-11)以外は形態は不明である。16号住居址出土の腹部と思われる土偶(46図-4)が特殊な形態と思われる。土偶のあり方としても特殊な部類には入らない。

近接する村上遺跡⁽⁴⁴⁾からは藤内式期の1軒の住居址が検出され、土偶が頭部と腹部の2点検出されている。腹部はA形態で、割れ口が分割塊制作法をよく示している。

釈迦堂塚越北A地区では8軒の藤内式の集落址が検出され、三口神平地区では7軒の集落址、野呂原地区では5軒の集落址が検出されている。まず塚越北A地区では8軒の住居址すべてに土偶が検出され、形態的にもそれぞれ個性があり、土偶が個々の住居により、分有されていたのではないかと指摘したことがある⁽⁴⁵⁾。

この8軒の集落址は土器型式から4軒ずつに分離される。古期のSB-51でA1形態、B1形態、恐らくはA1形態の脚部の3点、SB-10ではC形態と不明の頭部と脚部の3点、SB-04ではC形態、F形態、不明の胴部3点、脚部1点の6点、SB-40は土偶の出土が認められていないが、掘り込みの検出されなかった住居址であるから、A形態の腹部、不明の背部、脚部の3点の存在の可能性が指摘できる。新期のSB-47では不明の頭部と胴部の2点、SB-31ではA1形態、B1形態、不明の頭部と脚部の4点、SB-01ではF形態、恐らくはA1形態の腹部、脚部の4点、SB-29ではA1形態と思われる腹部1点が出土している。土偶の分有関係は鳴る土偶であるB1形態の土偶に、SB-51と31の2時期にわたって顕著に認められる。また出産土偶はSB-10と04の同時期に認められるが、SB-04は有孔鏝付土器に点を独占していた特異な住居址だけに、あるいは継続的な住居址であったかもしれない。

三口神平地区では7軒の藤内式期の集落址を検出しているが、このうち土偶を保有していたのはS-Ⅲ区SB-49, 84, 100, S-Ⅳ区SB-32, 52の5軒である。SB-49で頭部と脚部(54, 55)、SB-100で頭部と脚部(56, 57)、SB-84で腹部(58)が出土している。SB-32で頭

部（59, 60）、腕（61）、腹部（62）、脚部（63）、SB—52で頭部（64）、脚部（65, 66）の出土がある。土偶が小片のため全体像が判明しないが、塚越北A地区のような個々の形態を分有する傾向は認められない。

個々の住居が保有する土偶は、恐らくはA1形態ではないかと思われるが、三口神平地区に他の形態の土偶が検出されていないかという点、該期のC形態の土偶（67）の出土もある。藤内式期では塚越北A地区に比較して、形態差に乏しい傾向が窺えるが、他の集落址の場合ではこうした傾向がむしろ一般的ではなかったかと思われる。野呂原地区では藤内式期の住居址は4軒である。うち2軒は土偶を保有しない。13号住居址はB2形態に属する土偶であることから、この地区でも土偶の形態別の分有関係があったのかもしれない。

塩山市重郎原遺跡⁽⁴⁶⁾では1軒の住居址で、1点の土偶頭部が出土している。塩山市では安道寺遺跡⁽⁴⁷⁾の調査で18点の土偶の出土があるが、住居址と対比した個々の資料分析はできない。報告された10点の資料から、11号住居址出土の頭部（75図—2）が確認される。都留市中溝遺跡⁽⁴⁸⁾では6軒の住居址が検出され、1号住居址1点、2号住居址2点、4号住居址1点、6号住居址1点と5号住居址を除いて土偶の出土がある。

（6） 中期井戸尻式期の土偶

北巨摩郡、中巨摩郡ともに良好な井戸尻式期の住居址も集落址も検出されていないが、該期の土偶と思われるものは幾つか出土している。例えば高根町北割のA2形態の土偶⁽⁴⁹⁾、韮崎市坂井の土偶（表No. 20, 97, 108, 111）などがある。

東八代郡では中道町上の平遺跡で、5軒の井戸尻式期の住居址が確認されている。土偶を出土したのは17, 20号住居址である。17号住居址ではPit 9からB2形態の腹部が出土し、20号住居址では大きな脚部が出土している。上野原遺跡では7軒の井戸尻式期の住居址を検出しているが、土偶はB2形態と思われる腹部（68）が1点出土しているだけである。境川村一の沢西遺跡⁽⁵⁰⁾では6軒の住居址と17基の土坑を検出している。4号住居址で大型土偶の頭部（69）・胸部と両腕部・胸部の2点、5号住居址で頭部（69）1点、10号住居址で腹部1点、41号土坑から頭部（70）1点の出土がある。土坑出土の頭部は顔面把手と思われるので、住居6軒のうち3軒で土偶を保有していたことになる。

特に4号住居址は出土遺物も豊富で、その床面から顔面を下にしてG形態の大型土偶が出土しているのは注目される。この土偶は土偶としても特異な存在である。まず、土偶には鼻の頭を抑えたような鼻の穴が上を向いた表現は釈迦堂野呂原地区（72）以外はほとんど見られず、本来顔面把手の表現法である。乳房の間をとおる沈線文は釈迦堂の土偶（235図—125）にも見られるが、左手に施された沈線は非対称的である。後頭部のへび文様は長野県藤内遺跡の土偶が著名で、都留市中溝遺跡、釈迦堂遺跡群等に類例があり、藤内式期と井戸尻式期に限られ、点数も少ない。

B1形態の土偶は貉沢式期から井戸尻式期までよく変遷がたどれる。井戸尻式期の好例が1点

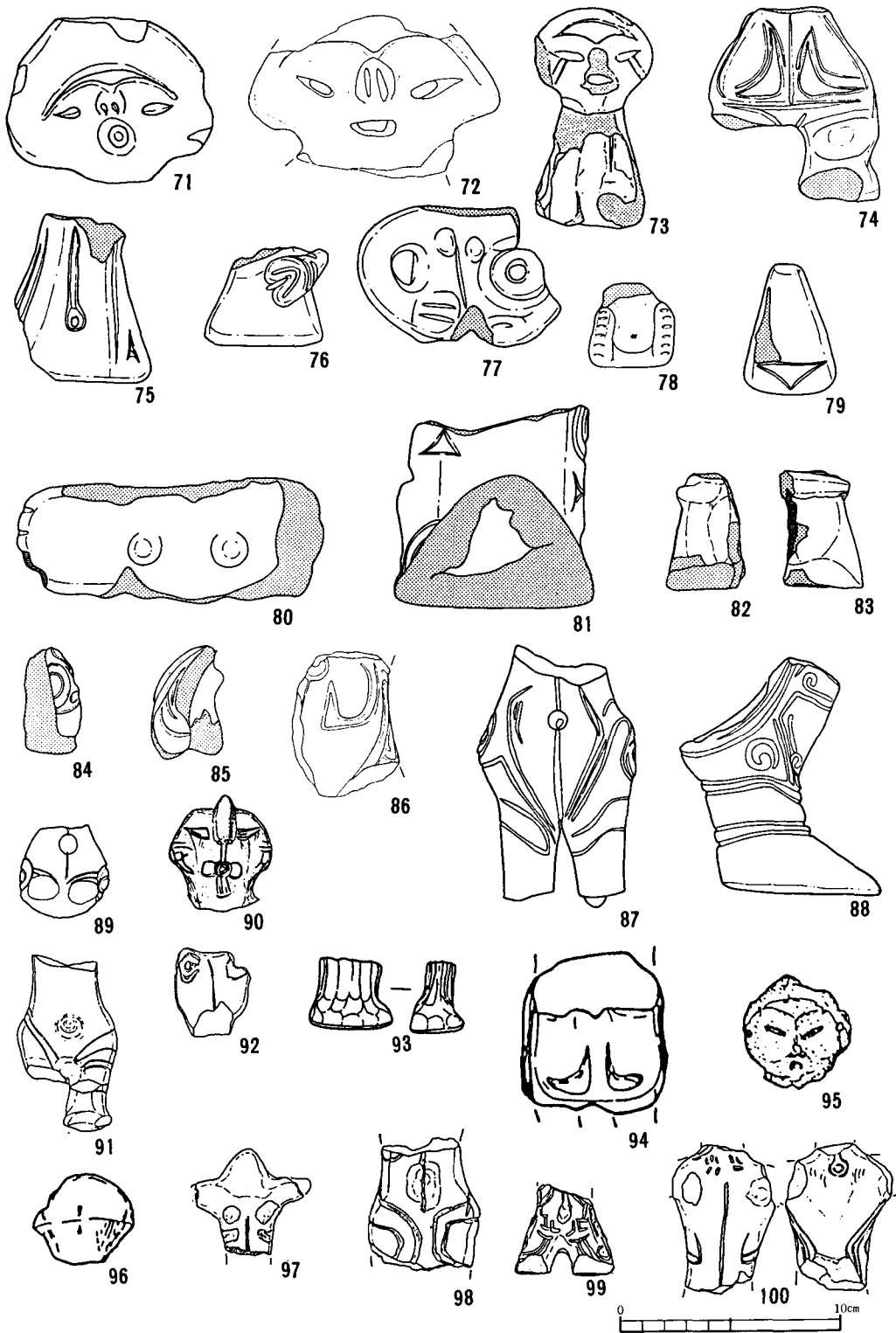


図3

71 一の沢西 72, 74~86 釈迦堂 73 国分寺 87~89 安道寺
90 頭無 91~96 柳坪 79~100 姥神

(73)一宮町国分寺遺跡⁽⁵¹⁾から出土している。ほとんど両手の表現を省略し、著名な八王子市榎原遺跡⁽⁵²⁾の鳴る土偶に近似する。国分寺例を井戸尻式期に比定する理由は腹部の彫刻的な手法とともに頸部背面に隆起帯によるV字文を持つことである。

次に釈迦堂三口神平地区では15軒の集落址が検出されている。このうち土偶を持つのは、S—Ⅲ区SB—36、S—Ⅳ区のSB—60であるが、当該期の土偶と断言できる資料とは言えない。野呂原地区では5軒の集落址が検出されているが、10号住居址に集中し、7点の出土がある。この土偶も所属時期を確定できるものではない。このように釈迦堂遺跡群においても、井戸尻式期の住居址出土の井戸尻式期の土偶は少なく、しかも型式学的特徴も少ないものが多いことが看取される。

釈迦堂の住居址外出土土偶の中には、型式学的にも井戸尻式期の土偶として確定できるものは少なくない。A1の形態(74)、B1形態(75)、B2形態(76)、C形態(77)、D形態(78)、E形態(79)、G形態(80)、H形態(81)などが見られる。

またこの期の土偶の足部が約240m離れて、S—Ⅲ区土器すてば出土土偶(82)とS—Ⅴ区土器すてば出土土偶(83)とが接合する。この240m離れた集落址を同一かあるいは別個のもの⁽⁵³⁾と考えるかによって、この土偶の意義は大きく異なる。この点に関しては鈴木敏昭氏の指摘がある。

三口神平地区と野呂原地区の井戸尻期の様相は類似点の方が多く、土器の様相が多少異なる。両者とも大木系土器の出土はあるが、野呂原地区の方が出土比率が高く、伊那谷系土器の出土は野呂原地区に限られる。この伊那谷系土器は山梨県内にあっても数カ所の遺跡に限られているようである。土器に関する限り両者の性質は異なる点のみは指摘できる。

(7) 中期曾利古式期の土偶

いわゆる新道土器群の土偶が強い個性を保っていたのに対して、曾利式期の土偶は関東、中部、北陸、東北南部等と多くの共通性を持っている。また土器型式もこれらの地域のものと影響関係にある。先述したように、ここでは曾利式土器を3細分して論述する。

新道群の土偶の系譜を引き、臀部の大きな土偶であるが、曾利式期に至って、分割塊制作法が大きな変化を見せ、土偶の臀部が個別の粘土塊で制作されることなく、脚部と同一か腹部と同一に作られる。であるから、曾利式土偶は臀部と脚部の塊として出土することが多い。また、新道群土偶は垂れ下がった逆ハート形の臀部をなすが、曾利式土偶では細くなり、出尻になるのが大きな特色である。また文様では対称弧刻文は形骸化し、刻文にはならず、沈線で表現されるものもある。また、次の曾利新式からプラ文、たすき文、紋付文、規矩文が顕著となってくる。

曾利古式の住居址の検出例は極めて少なく、様相が不明な部分が多い。土偶についても、著名な坂井遺跡のものは曾利古式前後のものが多く、該期のものはほとんどないと言ってもいいほどである。

釈迦堂三口神平地区では曾利古式第1段階で5軒の住居址を検出しているが、住居址からの土

偶の出土はない。第2段階の住居址12軒，12点（228図—55，256図—233，493図—78，493図—78，83，495図—91，92，499図—127，500図—128，512図—200，201）の出土があるが，型式学的に確言できるのは（84，85）の2点のみである。野呂原地区の曾利古式の住居址は4軒あるが，6号住居址から腹部1点（86）の出土がある。曾利古式第3段階の住居址は6軒検出されているが，別時期の土偶が出土している。

安道寺遺跡では曾利古式に相当する住居址が8軒あり，図示されたもののうち，該期の土偶は2点（87，88）で，（87）は2号住居址の焼土内から出土している。こうした例は東京都八王子市(54) 櫛田遺跡にある。出土状態も特異ではあるが，この2点の土偶が該期の特徴を顕著に表している。（87）は腹部から脚部までの部分であるが，ヒビ割れが股の間から腹部中央を走っており，先述した分割塊制作法で制作されている。この点は（88）でも同じであり，分割塊面を観察できる。また，腰の周りに施される文様は規矩文の古い様相をもっている。出尻になった部分は新道式土器群期の土偶とは大きく異なる。（89）は6号住居址出土で，B形態と思われる。図版のみ掲載された2号住居址出土土偶（PL.10）は曾利新式期の土偶であろう。

（8） 中期曾利新式期の土偶

この時期は遺跡が爆発的に増大する時期で土偶の出土も多く，ブラ文，たすき文，紋付文，規矩文(55)を持った土偶が数多く出土する。

北巨摩郡では長坂町柳坪遺跡Aで曾利新段階の住居址が6軒検出されているが，土偶（90）を出土したのは2号住居址のみである。この土偶の口唇部周辺に見られるトリプル三角文は該期の土偶にはしばしば見られ，イレズミを表現したものと言う指摘もある。84年の調査で，新たに4軒の曾利式期の住居址が検出され，土偶は11号住居址（91）と16号住居址（92）で出土している。また土偶の所属時期もおおむね該当するものと思われる。

柳坪遺跡Bでは曾利式期の住居址は12軒検出され，84年の調査で2軒(56)の追加があったものの土偶の出土はない。

頭無遺跡では16軒の住居址を検出し，1号で1点（93），12号で1点（94），14号で2点（95，96）の土偶の出土がある。型式学的にそれぞれの住居址の時期に該当するのは，14号出土の頭部であろう。12号出土の腹部は対称弧刻文の変形文や渦巻文と三叉文から，曾利古式段階の土偶と見た方がよく，住居址の時期より古い。ここでは，集落址と土偶の関係は不透明な部分が多いと言わざるを得ない。

大泉村では圃場整備事業に伴って，いくつかの曾利式期の集落址の検出がある。(57) 姥神遺跡では曾利式の住居址が12軒検出されている。16，21住居址で土偶の出土がある。16号住居址出土土偶（97）は土偶としては，曾利新式に属するもので，土器もほぼその時期に該当しよう。(58) 21号住居址出土土偶（98）はやや古い様相をもつが，住居址の時期は曾利新式段階である。この他に住居址外出土土偶2点（99，100）がある。（99）が古い様相をおびるが，（100）はブラ文，紋付文を持

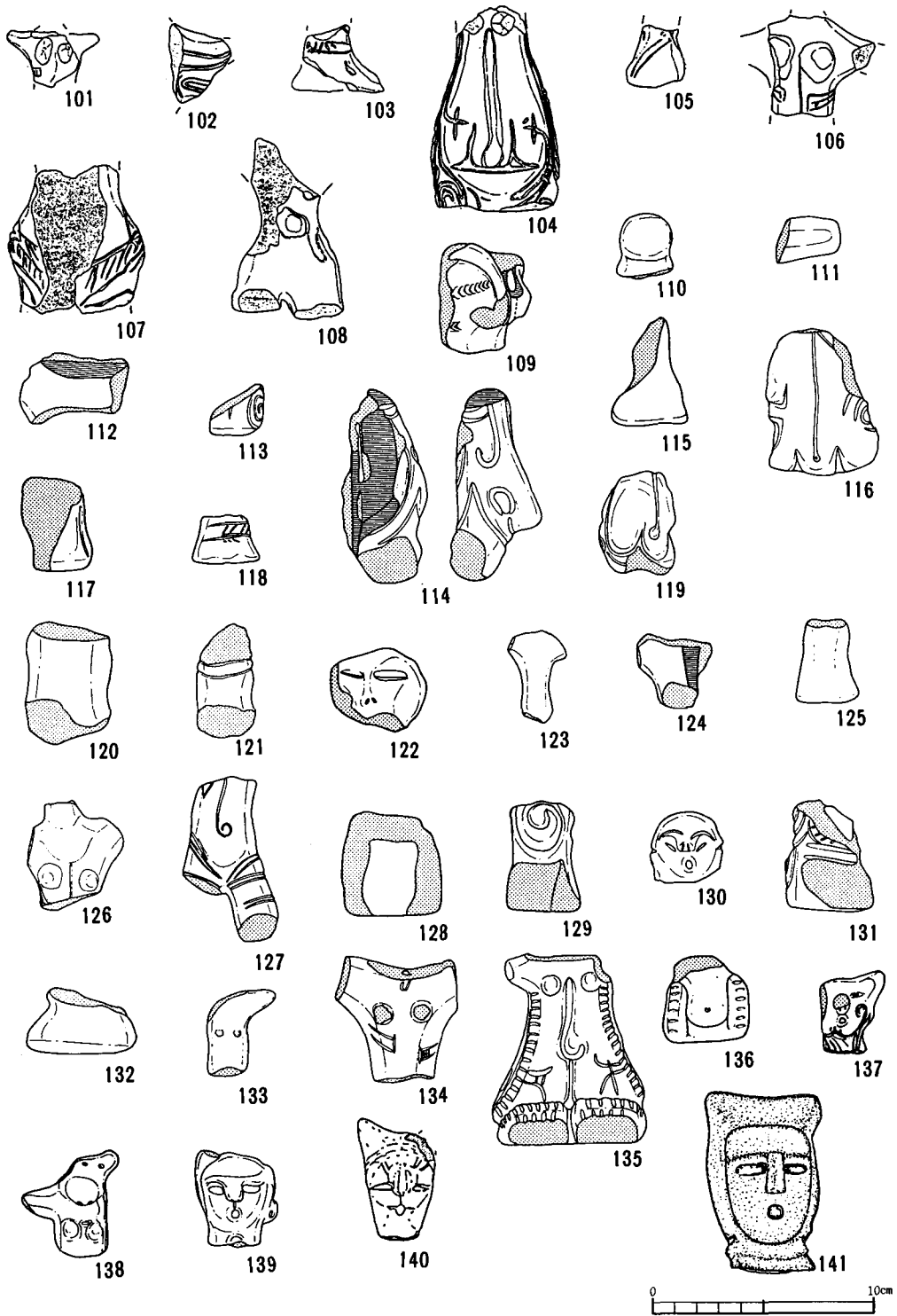


図 4

101~108 上の平 109~139 釈迦堂 140 上野原(八代町) 141 住吉

ち、曾利新式期の特徴をよく保っている。

この姥神遺跡は17号住居址を曾利古式段階、13号住居址を曾利新新式段階と捉えれば、曾利新式段階の集落10軒で、(96)を除外したところで、3点の土偶を保有していたことになる。

ところが、同じ大泉村方城第1遺跡⁽⁵⁹⁾では曾利新式段階の住居址7軒を検出しながら土偶の出土はない。また近接する大和田遺跡⁽⁶⁰⁾では、やはり7軒の住居址が検出されているが土偶の出土はない。この2つの集落址については、報告者伊藤公明氏の分析があり、方城第1遺跡は「拠点集落」で大和田遺跡は「周辺集落」であるという指摘がある。

この他、白州町根小屋遺跡⁽⁶¹⁾では12軒の曾利式期の住居址を検出し、1号住居址では釣手土器を出土し、拠点的な集落と思われるが土偶の出土はない。葦崎市北後田遺跡⁽⁶²⁾では15軒の曾利式期の住居址を検出しているが、土偶の出土はない。後田遺跡⁽⁶³⁾では3軒の曾利新式期の住居址を検出しているが、土偶の出土はない。近接する藤井の台地上の坂井遺跡では47点の土偶の出土があり、曾利式期に属するもの30点以上は出土しているのとは対照的である。ただ後田遺跡ではかつて志村瀧蔵氏によって採集された土偶7点が坂井考古館に保管されているので、今後の調査によっては土偶出土の可能性は十分ある。こうして見てくると、北巨摩郡下では土偶保有集落と土偶を持たない集落の存在が明らかとなってくる。

東八代郡では中道町上野原遺跡で4軒の曾利式期の住居址を検出しているが、該期の土偶はない。ただし、71年の調査⁽⁶⁴⁾で土偶の出土が報じられているので、土偶を保有しない集落ではない。上の平遺跡では21号住居址1軒の検出であるが、土偶は2点(101, 102)出土している。さらに型式学的には6点(103, 104, 105, 106, 107, 108)をあげることができる。特に(104)は曾利古式土偶の中でも最も古い部分に属するものではないかと思われる。

境川村一の沢遺跡⁽⁶⁵⁾では曾利式期の住居址9軒を検出し、土偶は曾利古式段階の4号住居址と曾利新式段階の2号住居址からそれぞれ1点出土している。

八代町上の平遺跡⁽⁶⁶⁾では、曾利新式期の土偶が3点と新新式段階土偶1点が出土している。

一宮町北堀遺跡では9点の曾利新式期の土偶の出土があり、このうち59号住居址出土の頭部(33-5)は口縁部にトリプル三角文を有する土偶である。61号住居址出土の頭部と両手を欠く土偶(33-6)は小型粗製のものである。(33-7)は異時期の遺構出土で他はグリット出土品である。曾利期の住居址4軒で9点の土偶の出土は割合的には多い部類に属するであろう。約2km離れて釈迦堂遺跡群が展開する地域の地域性であろうか。

釈迦堂三口神平地区では曾利新式第1段階の住居址は7軒検出され、土偶はS-Ⅲ区SB-105(109), S-Ⅳ区SB-20(110, 111, 112, 113, 114), SB-56(115), SB-55(116, 117, 118)の10点の出土がある。このうち(109, 116)は異時期の土偶と確定できるものである。SB-20に土偶が集中する傾向が窺える。

曾利新式第2段階の住居址は6軒検出され、S-Ⅲ区SB-37(119, 120), SB-41(121), SB-43(122, 123, 124, 125)の7点の土偶の出土がある。すべてがほぼ該期の土偶と判断され

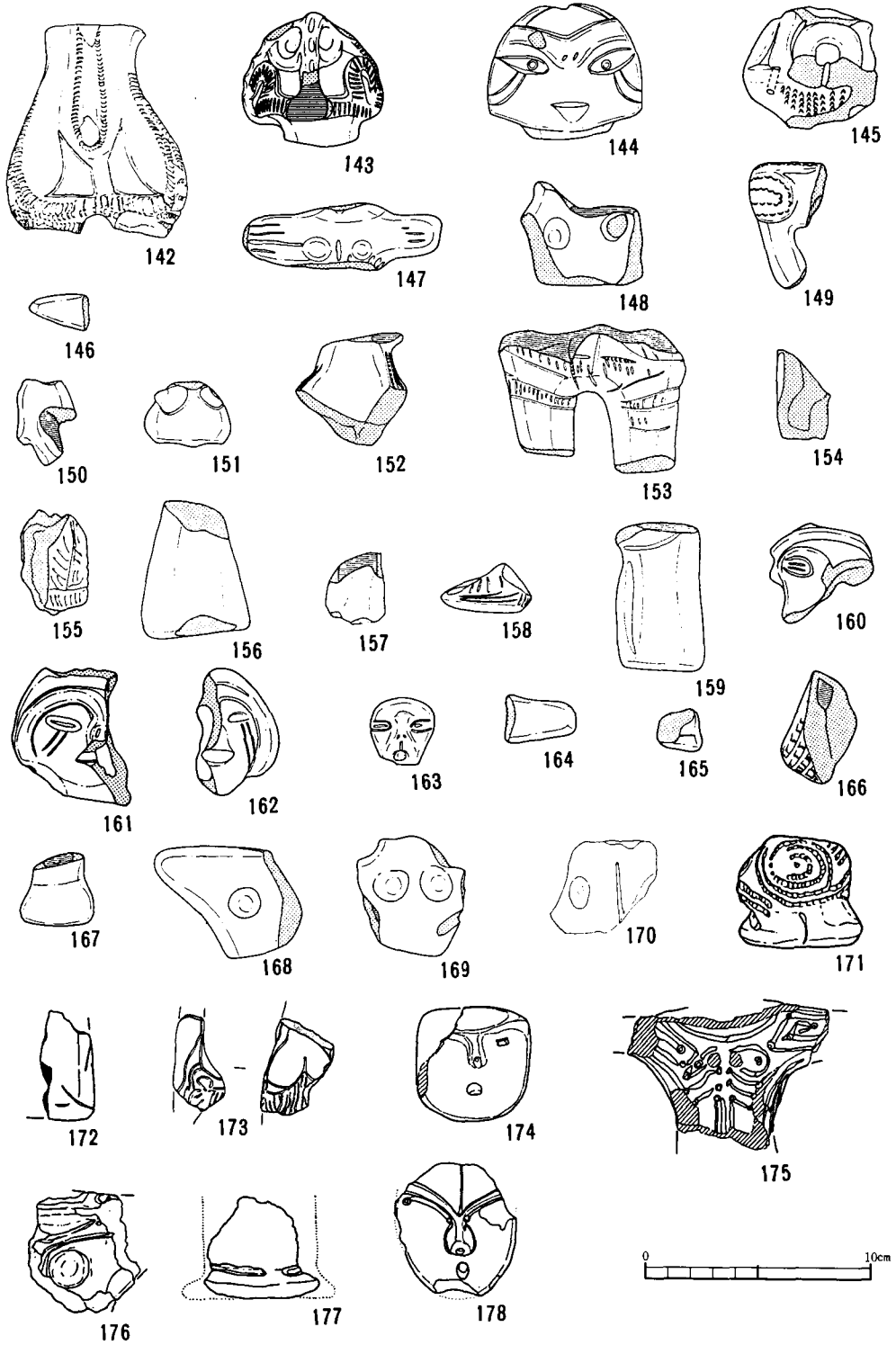


図5

142~170 釈迦堂 171 金の尾 172 上の平 173 久保屋敷
174, 175 青木 176 姥神 177, 178 金生

る。特にS B—43出土の(123, 124, 125)は小型のC形態の土偶と思われる。

曾利新式第3段階の住居址は5軒検出され、S—Ⅲ区S B—05(126, 127, 128, 129), S B—113(130), S B—109(131), S—Ⅳ区S B—44(132)の7点の出土がある。このうち(128)が別時期のものと思われ、(129, 131)がやや古い様相を保っている。特に(130)は埋甕内出土と言う特異な存在である。また(126)と(127)は接合個体で、該期の特色をよく表したバンザイ土偶である。

曾利新式第4段階の住居址は9軒検出されている。S—Ⅲ区S B—46(133, 134, 135), S B—93(136)の4点の出土が知られている。このうち(135)は、住居址の出入口部埋甕の近くから出土し、筆者自身が調査したもので、この住居址に伴うものと確信している。しかし、型式学的には曾利古段階のものであるので、土偶の継続的使用が考えられる。また(136)は井戸尻期の所産であろう。

都留市久保地遺跡では曾利式期の住居址が22軒検出されているが、土偶の出土は知られていない。また同市尾咲原遺跡⁽⁶⁷⁾では27軒の住居址が知られているが、土偶の出土はない。両遺跡とも本報告がなされていないが、土偶を保有しない集落と考えられよう。

曾利新新式段階の住居址は4軒を確認しているが、土偶の出土はない。この時期から土偶は急速に減少する。型式学的には頭部が角状に盛り上がったもので、顔の表情も後期土偶の無表情な表現に近いものである。この観点に立って抽出すると、(137, 138, 139)の3点の土偶が指摘できる。葦崎市坂井遺跡(市誌写真18—1)、八代町上の平遺跡(140)、都留市法能遺跡⁽⁶⁸⁾1号住居址出土土偶(141)は曾利新新式期の土偶と思われるが、出土土器は曾利新式期のものであり、土偶がやや新しいと思われるが、あるいは角状頭部の表現が新式段階から出現するのであろうか。

住居址出土の土偶について、ここの時期別に述べてきたが、土坑等出土のものは、土偶個々の時期が判断しがたい部分があるので、一括しておきたい。

次に土坑出土土偶をまとめると、釈迦堂S—I区で、S K—220(142)で藤内式期の胴部1点が出土している。S—Ⅲ区はS K—25(143), 48(144) 291(145), 66(146), 03(147), 64(148), 129(149), 173(150), 01(151), 60(152), 110(153), 143(154), 201(155), 03(156), 284(157), 287(158), 391(159)がある。このうちS K—291, 129は新道式期に、S K—48, 129は藤内式期に、S K—25, 03は井戸尻式期の可能性がある。またS K—64, 01, 110, 201は曾利式期に置かれよう。S—Ⅳ区ではS K—178(160), C—9土坑(158, 159), 139(163), 53(164), 156(165), 212(166), 49(167)があり、S K—516が貉沢式期に、212が新道式期に、128, C—9土坑が井戸尻式期に、もう1点のC—9土坑出土品が曾利式期に比定されよう。N—Ⅳ区ではS K—03(168), 02(169)の2点がある。また、S—Ⅴ区では9, 10号土坑で、(170)が出土している。

他の遺跡では土坑出土資料が極めて少ない。金の尾遺跡のピットから、貉沢式期と思われるもの(171)、上の平の17号住居址から、井戸尻式期のもの(172)、久保屋敷の5号土坑から曾利新

式期の胴下半部（173）の出土のみである。

（9） 後期堀之内式期の土偶

県内の後晩期土偶は、現在ようやく資料が揃いつつある状況である。堀之内式期では、関東地方には筒形土偶、ハート形土偶など特色ある土偶があるが、県内ではその影響を受けた土偶が散見される程度である。

北巨摩郡小淵沢町岩窪遺跡⁽⁶⁹⁾で2点の土偶が知られている。1点は完形のものである。広げて下げた両腕、○脚は後期の堀之内式から加曾利B式期にかけてのものであろう。

高根町青木遺跡では土偶が22点出土し、10点の図示がある以外に中期脚部2点、後期脚部10点がある。堀之内式期の住居址は検出されていないが、頭部（174）はハート形土偶のものであろう。（175）は刺突文と沈線文の組み合わせから、堀之内式期のものであろう。

大泉村姥神遺跡は曾利新式土偶のところでも触れたが、堀之内1式期の敷石住居址1軒、堀之内2式期の住居址2軒、堀之内2式～加曾利B1式の住居址2軒を検出している。後期土偶は遺構外から6点出土し、そのうちの（176）は櫛原氏の指摘もあるように堀之内式期の土偶であろう。

金生遺跡では堀之内式期の住居址3軒が検出されているが、12号住居址で1点（177）が出土しているのみである。他に（178）がハート形土偶の頭部と思われる。

他に単独出土の土偶で該期のものは、先述した明野村水窪遺跡のハート形土偶がある。韮崎市⁽⁷⁰⁾中田遺跡ではハート形土偶の脚部が出土している。同市では近接する後田遺跡から中空土偶が2点（179,180）出土している。1点（179）は完形に復元され、全体像が判明している。長野県辰野町泉水遺跡の中空土偶に近似している。体部に施される文様から堀之内2式期のものと思われる。明野村清水端遺跡⁽⁷¹⁾でも同様な土偶の破片（181）が出土している。この形態の土偶は本地域の堀之内2式段階の定型的な土偶であると思われる。中実土偶については不明で、確定的な資料に欠けている。

（10） 後期加曾利B式期の土偶

加曾利B1式期の土偶は、高根町石堂遺跡の完形土偶が好例である。先述したようにこの土偶の胸部にある逆「の」字状文は土器に施される文様と同一であることから、該期の土偶の基本形態としておきたい。ペンギンのような腕の形、腕から乳房に連続する隆帯表現、パンツ状の表現を特色としておきたい。

石堂遺跡の土偶頭部は頸部がV字状に割れており、これは完形土偶も同じである。この割れ方は山形土偶と思われるものに共通している。

同町の青木遺跡の頭部（182）は乳房が明確ではないが、肩部からの刺突文は石堂遺跡の完形土偶と類似した点である。（183,184）はすでに櫛原氏の指摘にもあるように腰部の鋸歯状沈線文は関東東北地方の加曾利B式段階の土偶によく表現される文様である。青木遺跡では5軒の加曾

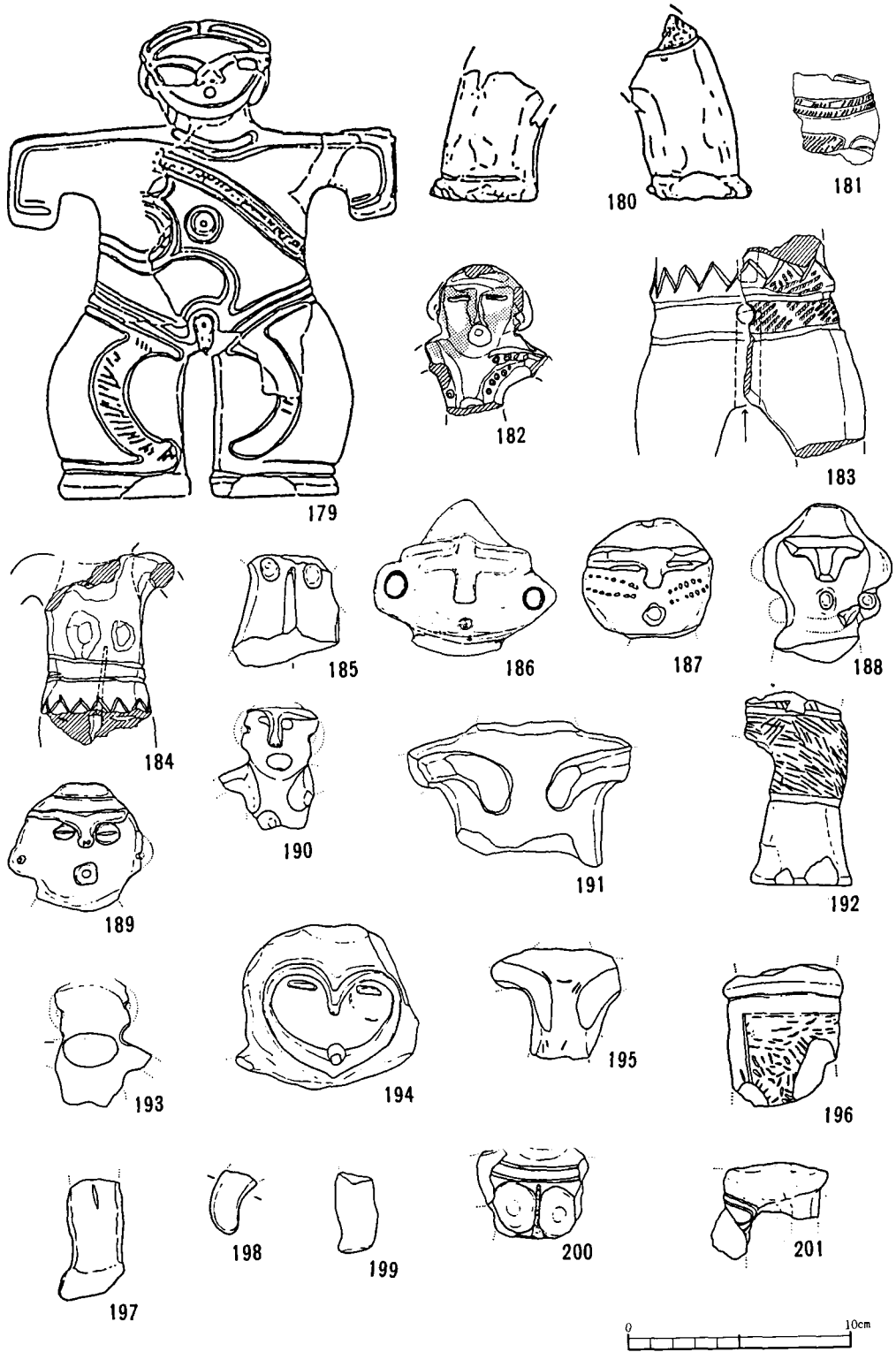


図6

179, 180 後田 181 清水端 182~184 青木 185, 187~201 金生 186 中谷

利B式期の住居址が検出されているが、少なくとも、3点以上の土偶を保有していたことになる。

金生遺跡では加曾利B1式期の住居址は37号住居址1軒で、土偶1点(185)が出土している。これは型式学的特徴の少ない資料である。都留市中谷遺跡で山形土偶(186)の好例が出土している。後頭部の瘤状隆起表現やおちょぼ口の表現など関東地方の山形土偶と比べて遜色ない。この資料から再び金生遺跡の土偶を見れば、(187, 188, 189)などを抽出できるが、これらは異時期の遺構から出土している。また先の石堂遺跡の完形土偶の乳房と同様な表現は金生遺跡土偶では(190, 191)に見られる。

さて、金生遺跡では加曾利B2式期の住居址は、15号と23号であるが土偶の出土はない。加曾利B2新式の住居址は4号で1点(192)の出土があるが、この脚部が該期の所産とは明言できない。

(11) 後期後半の土偶

山梨県では後期後半の土器と住居址は、金生遺跡の報告書の刊行によって資料が明らかになってきた段階である。

つまり、加曾利B2式以降の時期は土器型式と対応した土偶の分析は大まかな区分とならざるをえない。金生遺跡で、後期後半とした住居址は5, 6, 7, 24号の4軒である。6号で7点(193, 194, 195, 196, 197, 198, 199)の出土があり、7号で1点(200)、24号で2点(201, 202)の出土がある。このうち特徴的な文様を有するのは(202)で、住居址外ではあるが、(203)後期後半の土器文様の中にこのような沈線間に刺突文を見いだすことができよう。

後期後半から晩期とされた住居址は8, 9, 19A, 19B, 20, 27, 38号の7軒の住居址である。土偶を出土したのは8号(204, 205)、20号(206, 207, 208)、27号(209)、38号(210, 211)8点である。

(12) 晩期の土偶

都留市中谷遺跡から、完形土偶(212)が配石遺構の中から出土し、多くの概説書に掲載されている。この土偶は板状の立像形の土偶であるが、自立はせず、背面に該期の土器と同様な文様を施すことを特色としている。尾咲原遺跡の2号住居址出土の頭部を失った土偶⁽⁷²⁾もやはり、背面に入り組み三叉文を施し、その間を刺突文で充填している。瘤状の突起も見られる。出土土器の様相は大洞BC式の新しい部分と考えられる。土偶は清水天王山式に属するものであるから、清水天王山3式に比定されよう。該期の土偶は塩山市欠道遺跡⁽⁷³⁾にも2点(213, 214)見られる。金生遺跡では、土器のうえでも清水天王山式の周辺地域と考えられ、該期に確定できる土偶は1号配石出土土偶(215)であろう。

金生遺跡で、晩期前半とされた住居址は10, 11, 13, 14, 16, 18, 21, 22, 28, 30B, 31, 39

号の12軒である。土偶を出土したのは11号で(216), 14号(217, 218), 18号(219), 22号(220), 30b(221, 222)の7点の出土がある。

晩期後半とされた住居址は17, 25, 26, 29号の4軒の住居址である。土偶を出土したのは26号(223, 224, 225), 29号(226, 227, 228, 229, 230)で8点の出土がある。晩期前半から後半の30A号

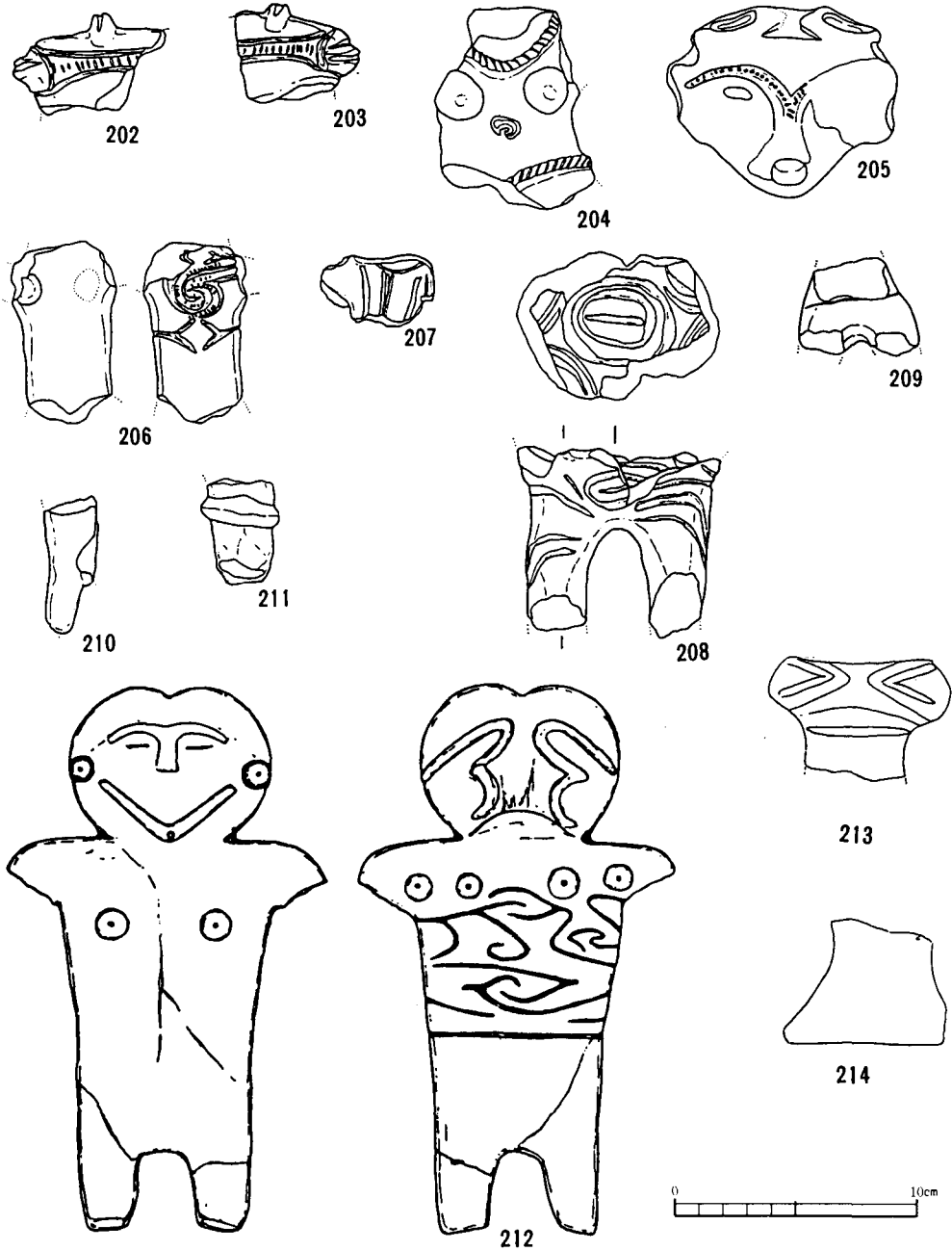


図7

202~208 金生 212 中谷 213, 214 欠道



図 8
215~232 金生

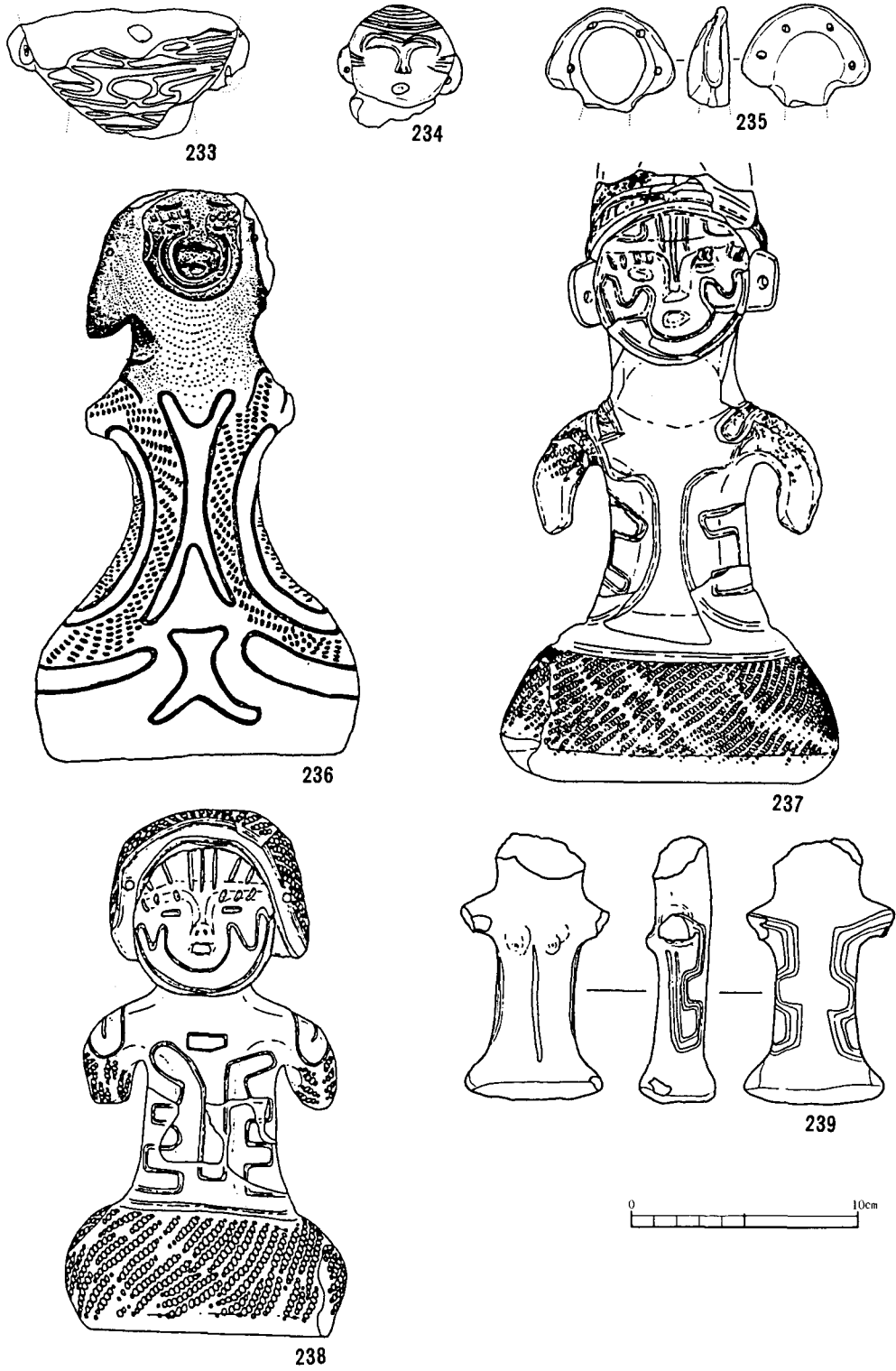


図9

233~235 金生 236 坂井 237, 238 岡 239 金の尾

住居址から脚部（231）1点が出土している。

2号配石遺構から出土した金生の中空土偶はその特異な形態から、土偶ではないという意見も聞かれるほどである。この配石遺構は長期にわたって使用された遺構でこの土偶の時期決定についても、問題を含むが、報告者の新津健氏は大洞 C₂ 式を上限とした時期に比定している。この土偶の時間的位地を考えるには、その腹部の渦巻文と肩部の刺突を有する隆帯である。この肩部の隆帯と関係ある資料に伝長野県出土の有髻土偶⁽⁷⁴⁾をあてたい。この土偶も設楽氏と鈴木氏⁽⁷⁵⁾によって、検討が加えられているが、決着を見ていない。鈴木氏は肩部の隆帯を茨城県山王遺跡の安行 3c 式土偶に求め、設楽氏の大洞 A' 式の影響を考えられた。筆者はこれらの考えとは別に、脇腹部の雷文風の沈線文は海戸遺跡の容器形土偶のそれと同一であり、最近では松節遺跡⁽⁷⁶⁾の弥生中実土偶（566図-10）や塩崎遺跡⁽⁷⁷⁾の土偶（図）とも類似する点に注目している。この点を考えれば、金生遺跡の中空土偶はより新しい大洞 A' 式に比定されるものではなかろうか。

なお、（233）は顔に浮線網状文が施されている。氷 I 式に比定されるものである。また、有髻土偶を思わせる（234）があり、（235）は長野県福沢遺跡土偶⁽⁷⁸⁾（566図-6）のような土偶ではなかろうか。そうすると、この2点は晩期終末から弥生期に位置づけられよう。

なお、長坂上条遺跡の立石土坑から、晩期と思われる土偶の出土がある。

（13） 弥生時代の土偶

弥生土偶については、第2章でも触れたが、山梨県では敷島町金の尾遺跡⁽⁷⁹⁾で弥生後期の17号住居址で、中実土偶（237）が出土している。これは長野県松節遺跡、塩崎遺跡の土偶とも近似するものである。また福島県菅野遺跡⁽⁸⁰⁾の中実土偶とも類似する。脚部と思われる部分が広がるのも容器形土偶との共通性を窺わせる。菅野遺跡のものは頭頂部がガマグチのようになり、これは大洞 A' 土偶や容器形土偶とも類似する。おそらく金の尾遺跡の土偶もこのような頭部になるものと思われる。

さて、韮崎市坂井遺跡⁽⁸¹⁾の容器形土偶（236）は大甕に入ったまま発見されたものである。八代町岡の容器形土偶は2個体（237, 238）が出土し、同時に焼土と骨片を出土している。先述したように別個体の破片と条痕ある破片を伴出している。

4. 出土状況の分析

前期の土偶の出土状況を見ると、釈迦堂 Z 3 式期は発掘例が少ないのにも関わらず、土偶の出土は多い。しかも、いくつかのタイプが認識される。釈迦堂塚越北 A 地区では釈迦堂 A タイプ土偶が分割遺棄されており、獅子之前遺跡では獅子之前 A タイプ土偶がこれも、疑問がないわけではないが、分割遺棄されている。このように土偶が割られることは、前期中葉では確実な事実と言える。

また、再三触れるが、長野県阿久遺跡は、この時期のイメージを覆すほどの集落址であるが土偶の出土はない。また最近この地方ではいくつかの該期の住居址の検出があるが、土偶の発見は報じられていない。このように土偶の出土遺跡には遍在性がある。

諸磯式土偶にもいくつかのタイプが認識される。獅子之前遺跡では2つのタイプが同時に存在するが、他の遺跡では、それぞれ1点の出土である。その中でも、天神遺跡では、諸磯b式期42軒、諸磯c式期7軒、五領ヶ台式期7軒、平安時代3軒の住居址を検出している。当然諸磯b式期の住居は細別されるであろうが、該期の土偶は1点である。諸磯b式期の集落址は中央部に土坑群を持つ、拠点集落址と考えられるが、土偶の出土が極めて少ない点は、獅子之前遺跡と対照的である。諸磯b式期で1遺跡で2種類以上のタイプが認められるのは獅子之前遺跡と群馬県城遺跡である。

なお、前期土偶は山梨・群馬県などのいわゆる諸磯式土器圏と仙台湾を中心とする大木式土器圏、青森県の円筒下層式土器圏の3つの大きなブロックが見られる。この大きなブロックの中でも、細かく見て行けば、土偶の多い地域とそうでない地域に分かれる。

中期土偶は群的な捉え方をすれば、大きく五領ヶ台式期、新道式土器群期、曾利式期に分離される。五領ヶ台式の土偶は、カップ形の頭部をした立像形土偶と思われるが、大石遺跡の五領ヶ台IIc式にC形態の土偶が見られるので、すでにこの時期に土偶がいくつかの姿態を持つことが明らかとなってきた。この傾向は新道式土器群期では発展するが、曾利式期になるとまったく様相を異にし、単純な形態に帰結して大小の差しか存在しない。

五領ヶ台式期の集落址は大泉村天神遺跡で7軒、中道町上の平遺跡で6軒、釈迦堂塚越北B地区7軒、三口神平地区で5軒、都留市久保地遺跡で6軒の検出がある。このうち土偶が出土したのは天神、上の平、塚越北B地区、三口神平地区の各遺跡で久保地遺跡では報告がない。いずれの遺跡も個々の住居と土偶との関係は不明である。

新道式土器群期では貉沢式、新道式期は良好な集落址に恵まれていないが、藤内式期が釈迦堂塚越北A地区、三口神平地区、野呂原地区でそれぞれ集落址が検出され、個々の住居址ごとに、土偶形態に違いがあり、土偶の分有関係の存在が指摘できる。また、井戸尻式期の土偶は現在のところ集落単位では良好な資料に恵まれていない。

曾利式期の土偶は甲府盆地の東八代郡下では、出土点数が多く、土偶を出土しない曾利式期の遺跡はないほどである。北巨摩郡大泉村では近接した大和田遺跡、方城第1遺跡では土偶はまったく出土せず、姥神遺跡では点数は少ないが出土し、集落ごとの違いが看取される。このことは、葦崎市坂井遺跡と後田遺跡、北後田遺跡、中田小学校遺跡の関係についても言えることである。しかし、土偶保有遺跡と非保有遺跡の性格的な違いについては、分析が十分でない。

後期堀之内式期の土偶はハート形土偶の影響を受けたものが水窪遺跡、中田小学校遺跡に見られ、また中空土偶の好例が後田遺跡で検出されており、これは配石遺構と関係するのかもしれない。金生遺跡では該期の住居址が3軒あるが、堀之内式期に確定できる土偶は数点に留まる。

加曾利B式期の土偶は石堂遺跡、青木遺跡の資料によって明らかとなってきた。山形土偶の好例も中谷遺跡にあるが、石堂遺跡のものはその影響を受けたものであり、青木遺跡のものは腹部の形では在地的なものの可能性がたかい。石堂遺跡、青木遺跡、金生遺跡、中谷遺跡のような配石遺構を持つ遺跡ばかりでなく、姥神遺跡のような集落遺跡からも出土している。

後期後半の土偶の様相は、県内では金生遺跡の資料と比較できる資料がないため、型式学的な操作は困難を極めるが、金生遺跡土偶(198,199)の2点は後期後半に属するものではなからうか。

晩期土偶は中谷遺跡の耳飾を付けた土偶が、配石遺構より出土し、その出土状況とともに型式学的にも清水天王山3式に位置づけられる大型土偶であるが、小型のものも塩山市欠道遺跡で出土している。少なくとも大型と小型の2つのタイプの土偶が存在していたと思われる。

晩期の個々の土器型式に対応した土偶の分析はできないが、金生の中空土偶は2号配石遺構と言う特殊な遺構から出土している点と特異な形状から、注目されてきた。2号配石に伴う遺物も後期から晩期末のものまであり、土偶の時期決定に苦慮するところであるが、新津氏は大洞C'式を遡らない時期においている。筆者は先述のように大洞A'式に置きたいと考えている。

また金生遺跡では1号配石遺構に30点もの土偶が集中している。土偶の個別な時期は判断に苦慮するところだが、後期から晩期まであり、新津氏の指摘のあるような東京都下布田遺跡の石棒集石土坑と類似するところがある。これは筆者等が再三述べている土偶の継続的使用の一例ではないかと思われる。

縄文文化が弥生文化に受け継がれる要素としては、石斧や石鏃が代表的なもので、土偶は弥生文化では欠落する要素の代表的なものであったが、近年弥生土偶の存在も明らかになりつつある。容器形土偶は土偶形容器と呼び換えられるように土偶の機能に大きな変化が存在したようである。ところが、中実土偶も歴然と命脈を保っていたのである。金の尾遺跡では弥生後期の住居址から出土している。縄文土偶の伝統は弥生後期まで存続したのである。

以上を整理すると

- 1) 縄文前期から中期までは確実に土偶保有遺跡と非保有遺跡の存在が確認される。
- 2) 東八代郡下の縄文中期遺跡の土偶保有率は山梨県下にあっても、特殊な部類に属する。
- 3) 集落や遺構ごとに土偶を見て行くと、土偶の継続的使用が想定される。
- 4) 新道式土器群期の土偶は多様な形態があるが、県下の土偶の変遷の中では、むしろ突出した現象と思われる。
- 5) 弥生後期まで土偶は存続する。

註

- (1) 北巨摩郡教育会 『先史原始時代調査』 PP18~23 1932
- (2) 小野正文 「縄文時代の土偶について」 『獅子之前遺跡発掘調査報告書』 山梨県教育委員会 1991
- (3) 小野正文 『釈迦堂』 I PP323~320 1986
- (4) 群馬県史編纂委員会 『群馬県史』 資料編 I P 453 1988
- (5) 渡辺誠氏教示

- (6) 小笠原好彦 『宮城の土偶の研究』I「縄文時代前中期の土偶」 PP192～256 1894
- (7) 戸沢充則 『岡谷市史』 PP298～291 1979
- (8) 古谷健一郎氏教示
- (9) 山梨県埋蔵文化財センター 『年報』1 PP10～12
- (10) 内田憲治 『城遺跡』『群馬県史資料編』1 PP440～451 1988
- (11) 吉田 格 「櫻田遺跡群・桜田遺跡・荒牧遺跡出土の顔面把手・土偶」『考古学ノート』7 PP19～24
- (12) 中山誠二ほか 『上の平遺跡』 PP49～50 1987
- (13) 吉田 格 「山梨県下向山遺跡」『考古学雑誌』48—3 P 218 1963
- (14) 長野県教育委員会 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』茅野市・原村その1富士見町その2 1976
- (15) 猪沢式から井戸尻式までの土器群を捉える方法としては勝坂式土器様式と言う呼び方が適切であるのかもしれない。しかし、その論理であると、猪沢式を独立させているが、むしろこれを含めて新道式土器様式と呼び換えることも可能であると考え。ここでは、従来の方法に従っているので、新道式土器群および新道式土器群期と仮に捉えておきたいと思う。
- (16) 小島俊彰ほか 『上山田貝塚』 PP60～79 1979
- (17) 小野正文編 『釈迦堂』Ⅱ PP236～241 1987
- (18) 小野正文 「釈迦堂遺跡群」『日本考古学年報』
- (19) (1)と同じ。図版31
- (20) 赤羽 篤・赤羽義洋 「長野県上伊那郡辰野町出土の土偶」『信濃』31—4 1979
- (21) 雨宮正樹・山下孝司・櫛原功一 「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協会誌』2号 PP9～38 1988
- (22) (21)と同じ。
- (23) 雨宮正樹 『石堂B遺跡』高根町教育委員会 1987
- (24) 山本寿々雄ほか 『中谷遺跡』都留市教育委員会 1973
- (25) 新津健ほか 『金生遺跡』縄文編 山梨県教育委員会 1987
- (26) 小野正文 「再び清水天王山式土器について」『山梨考古学論集』I 山梨県考古学協会 PP165～177 1986
- (27) 新津 健 「金生遺跡発見の中空土偶と2号配石」『研究紀要』1 山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター PP25～39 1984
- (28) 野沢昌康 「甲斐・岡遺跡出土の容器形土偶」『山梨考古』14号 PP31～34 1984
- (29) 長野県教育委員会 『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』原村その5 1982
- (30) 雨宮正樹 『町内遺跡分布調査報告書』高根町教育委員会 1987
- (31) 雨宮正樹 『西原・当町遺跡』高根町教育委員会 1988
- (32) 長沢宏昌ほか 『釈迦堂』Ⅲ 山梨県教育委員会 1987
- (33) 奥山和久 「久保地遺跡」『都留市史』資料編 PP261～314 1986
- (34) 志村瀧蔵 『坂井』1970
- (35) 小野正文 「所謂円錐形土偶に就いて」『研究紀要』2 PP13～22 1985
- (36) 沼崎 陽 「土製品」『神谷原』Ⅱ PP438～464 1982
- (37) (35)と同じ。
- (38) 鵜飼幸雄編 『棚畑』1990
- (39) 末木健編 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』北巨摩郡長坂・明野・葦崎地内 1975
- (40) 筆者は土偶の後頭部文様が玉抱き三叉文が施され、一つのマジカルな文様ではないかと考えている。黒駒の土偶の後頭部文様も玉抱き三叉文であるし、藤内遺跡のとぐろを巻いたへびの付く土偶は変形の渦巻三叉文である。
- (41) 山下孝司 『坂井南遺跡』葦崎市教育委員会 1984
- (42) 清水 博 『メ木遺跡』櫛形町教育委員会 1987
- (43) 中山誠二ほか 『上野原遺跡・智光寺遺跡・切附遺跡』山梨県教育委員会 1987
- (44) 森 和敏 『村上遺跡』山梨県教育委員会 1980
- (45) 小野正文 「土偶大量保有遺跡」『季刊考古学』30 1990

- (46) 上野晴朗 『重郎原遺跡』 山梨県教育委員会 1972
- (47) 小林広和 『安道寺遺跡調査報告書』(概報) 山梨県教育委員会 1978
- (48) 田村正和ほか 『中溝遺跡』 都留市教育委員会 1974
- (49) (1)に同じ。
- (50) 長沢宏昌ほか 『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』 山梨県教育委員会 1986
- (51) (35)に同じ。
- (52) 江坂輝弥編 『土偶芸術と信仰』 古代史発掘3 1972
- (53) 鈴木敏昭 「沈黙する女神」—土偶研究のゆくえ—『埼玉県立博物館紀要』16 PP3~23 1989
- (54) 八王子市栢田遺跡調査会 『栢田遺跡群1975年度調査概報』 1976
- (55) 武藤雄六氏は長野県富士見町坂上遺跡の曾利式土偶の説明のなかで、規と矩の表現を用いている。この曾利新式土偶に見られる直角と円を細い沈線で描く文様は中部、関東、北陸、東北南部の広い地域に見られる文様で、名称が必要なので、仮に規矩文としておく。
- (56) 米田明訓ほか 『柳坪遺跡』 山梨県教育委員会 1986
- (57) 櫛原功一 『姥神遺跡』 大泉村教育委員会 1987
- (58) 筆者と櫛原功一氏では土器型式の認定に違いがある。
- (59) 伊藤公明 『方城第1遺跡』 大泉村教育委員会 1988
- (60) 伊藤公明 『大和田遺跡・大和田第2遺跡』 大泉村教育委員会 1989
- (61) 平野 修 『根小屋遺跡』 白州町教育委員会 1985
- (62) 山下孝司 『北後田遺跡』 韮崎市教育委員会 1990
- (63) 山下孝司 『後田遺跡』 韮崎市教育委員会 1989
- (64) 1970年の精進湖線建設に伴う発掘調査で、多数の土偶が出たようである。『中道町史』上巻には発掘時の写真が掲載され、曾利式期の土偶の出土状態がある。
- (65) 小林広和・里村見一 『一の沢遺跡調査報告書』 山梨県教育委員会 1989
- (66) 奥山和久 『上の原遺跡』 八代町教育委員会 1985
- (67) 都留市史編纂委員会 『都留市史』資料編 地史・考古 都留市 1986
- (68) 都留市教育委員会 『都留市の先史遺跡』(上) 1976
- (69) 末木 健 「小淵沢町の原始・古代」『小淵沢町誌』 PP241~326 1983
- (70) 仁科義男 「山梨県出土の石器時代土偶」『考古学雑誌』23—12 1933
- (71) 宮沢公男 『清水端遺跡』 明野村教育委員会 1986
- (72) (67)に同じ。
- (73) 小野正文 「塩山市欠道遺跡出土の晩期縄文式土器」『丘陵』 PP44~48 1979
- (74) 荒巻 実・設楽博巳 「有髻土偶小考」『考古学雑誌』71—1 PP1~22 1985
- (75) 鈴木正博 「安行式土偶研究の基礎」『古代』87 PP49~95 1989
- (76) 長野県史考古資料編 前1巻4 1988
- (77) 『塩崎遺跡群』Ⅳ
- (78) (76)に同じ。
- (79) 末木健ほか 『金の尾遺跡・無名墳(きつね塚)』 山梨県教育委員会 1987
- (80) (74)に所載。
- (81) (1)および(34)に同じ。

図版の出典

- 1~9, 10, 17, 18, 142 小野正文 『釈迦堂』Ⅰ 山梨県教育委員会 1976
- 19~42, 44, 49~51, 54~67, 74~85, 109~139, 143~169 小野正文 『釈迦堂』Ⅱ 山梨県教育委員会 1978
- 72, 86, 170 長沢宏昌 『釈迦堂』Ⅲ 山梨県教育委員会 1976
- 11~13 小野正文 『獅子之前遺跡発掘調査報告書』 山梨県教育委員会 1991
- 14, 15 吉田 格 「山梨県下向山遺跡」『考古学雑誌』48—3 1963
- 16, 101~108 中山誠二 『上の平遺跡』 山梨県教育委員会 1987
- 43, 46, 73 小野正文 「所謂円錐形土偶に就いて」『研究紀要』1 山梨県考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター 1985
- 45, 48, 236 志村瀧蔵 『坂井』 1970

- 47, 90, 93~96 末木 健ほか 『山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』 北巨摩郡長坂・明野・
韮崎地内 1975
- 52 山下孝司 『坂井南遺跡』 韮崎市教育委員会 1987
- 53 清水 博 『メ木遺跡』 榑形町教育委員会 1987
- 68, 172 中山誠二ほか 『上野原遺跡・智光寺遺跡切符遺跡』 山梨県教育委員会 1987
- 69~71 長沢宏昌ほか 『一の沢西遺跡・村上遺跡・後呂遺跡・浜井場遺跡』 山梨県教育委員会 1987
- 88~89 小林広和 『安道寺遺跡調査報告書』 山梨県教育委員会 1978
- 91, 92 米田明訓ほか 『柳坪遺跡』 山梨県教育委員会 1986
- 97~100, 176 榑原功一 『姥神遺跡』 大泉村教育委員会 1987
- 140 奥山和久 『上の平遺跡』 八代町教育委員会 1985
- 141 都留市教育委員会 『都留の先史遺跡』(上) 1976
- 171, 239 末木健ほか 『金の尾遺跡・無名塚(きつね塚)』 山梨県教育委員会 1987
- 173 米田明訓 『久保屋敷遺跡発掘調査報告書』 山梨県教育委員会
- 174, 175, 182~184 雨宮正樹・山下孝司・榑原功一 「山梨県高根町青木遺跡調査概報」『山梨県考古学協
会誌』2 1988
- 177, 178, 185, 187~192, 215~235 新津 健 『金生遺跡』(縄文編) 1987
- 179, 180 山下孝司 『後田遺跡』 韮崎市教育委員会 1989
- 181 宮沢公男 『清水端遺跡』 明野村教育委員会 1986
- 186, 212 山本寿々雄ほか 『中谷遺跡』 都留市教育委員会 1973
- 213, 214 小野正文 「塩山市欠道遺跡出土の晩期縄文式土器」『丘陵』6 1979
- 237, 238 野沢昌康 「甲斐・岡遺跡出土の容器形土偶」『山梨考古』141 984

(山梨県埋蔵文化財センター)